

わたしは議案第77号「津幡町立学校設置条例の一部を改正する条例を廃止する条例」について、賛成の立場で意見を述べます。

私は河合谷小学校の子どもたちに何度もお会いしたということではありません。たった2回しか河合谷に行っておりません。しかし、たった2回行っただけで、子どもたちがどのくらいの自立心を持ち、自分の言葉でしゃべり、責任感を持って行動しているか、そのことを強く感じていました。だから、少人数の学校がこのような反対の討論で話されるということに、わたしは今とても残念な気持で一杯です。

みなさん。タイムという雑誌をご存知でしょうか。米国で1923年に創刊され、現在の発行部数は540万部。世界176カ国、延べ2900万人が読む世界最大の英文週刊ニュース誌「TIME(タイム)」に津幡町が紹介されたことはありませんが、河合谷が紹介されたことがあります。それは今でもインターネットで世界中の人が目にすることができます。1946年6月3日発表の「知識への渴望」と題した記事に、小学校を立て替えるという目的で始めた禁酒によって河合谷村が20年間でいくつも学校を建てられるくらいに資金を蓄えたと賞賛されているのです。世界的にはまったく無名の津幡町が唯一、世界に誇れるものがこの河合谷小学校の存在なのです。

地元の児童が少ないということが閉校の理由として問題にされていますが、わたしは、他の校区から河合谷小学校へ通う児童が増えていることに注目すべきだと思います。これは小規模特認校として3年間、地元の人たちが一丸となって学校を支えてきた成果であり、さらにはこの学校の魅力がじょじょに知られてきた結果なのです。特認校には人を惹きつける魅力がなければなりません。河合谷にはそれがあります。豊かな山林や溪流、畑や田んぼ、そして何より全住民が禁酒をしてまで教育を守り育ててきたという歴史と文化、現在も学校を支えている住民、保護者、教職員の存在です。河合谷だからこそできる、特認校だと思います。

津幡町史には河合谷の禁酒をした当時の様子が克明に書かれてあります。当初は村内のみの禁酒で、村の外ではお酒はOKだったそうですが、新聞や雑誌によって、全国に日本唯一の禁酒村として伝わるや、各地から激励や賛美の声が届けられるやら、共鳴者に感謝されるやらで、とうとう村の外へ出て禁酒を志す村民が増えたとのことでした。

近隣のある村長はもし自分の村で、河合谷と同じように禁酒の決議をしたら、竹槍を持って騒ぎ出す者が出るだろう。とうてい不可能な課題だ、と河合谷村民の意識の高さに感服したということです。

また大人たちが禁酒をして学校を建てたことを目の当たりにしていた子供たちには、口

で言う以上に、大きな倫理を教えることとなり、子供たちの「希望、自負、緊張」は涙ぐましいほどだったと書かれています。

財政難という点では、当時の河合谷村も、今日のわが町も同じです。でも禁酒をしてお金をため、学校を作った河合谷と比べて、いまの津幡町がギャンブル場を作らせて、そのテラ銭を教育、福祉に当てようとしているギャップを考えてみてください。

この臨時議会によって行政側と町民とが主張していることに大きな食違い、矛盾があるということが明らかにされました。町長は閉校の手順に問題は無いとし、直接請求を求めている住民側は不可欠とされている行政側との協議は無かったと主張しています。

いま大切なのは、どちらが正しいのかということで不毛な水掛け論争をすることではありません。いま最も大切なのは行政も議会も立ち止まって、河合谷地域の現状を直視するということです。

河合谷地域から学校を無くすということは、児童教育上の視点からのみ、語られるべき問題ではありません。学校がない地域に住みたいと思う親はいません。新しい家族が定住しないばかりか、今いる若い世代も次々と地域を離れていくことでしょう。ますます人口は減少し、近い将来、老人ばかりが残った限界集落化に拍車がかかり、極限の過疎化によって共同体は崩壊していくことでしょう。まさに行政の暴力によって地域が押しつぶされていくのです。

世代を超えて維持管理されてきた山林は荒れ放題に放置され、里山の荒廃は、町の荒廃、さらには国家の荒廃へと拡大していきます。

議会制民主主義が万能ではないことをわたくしたち議員は謙虚に受け入れねばなりません。地方自治法第74条は議会制民主主義の欠陥を打開する方策として、住民に直接請求の権利を認めているのです。

すなわち、相当数の住民が今回この議会が「まともに機能していない」として条例改廃の直接請求を出したことをわたくしたち議員は謙虚に受けとめ、かれらの強い意思に相応するまじめな覚悟をもって考え、討議し、打開の方策を探り出さねばなりません。

行政と住民とが手を携えて歩むのが地方自治の本来の姿です。であるからには、住民の理解なしに行政が、議会が本当にこのまま押し通していいのか。いま議会に問われているのはその判断なのです。

学校をいまずぐ閉校にするのではなく、条例の効力の発生を一定の期間凍結し、その間、行政と住民とが同じテーブルにつき、そのテーブル上にいいこと、悪いことを出し合っ問題点を明らかにし、問題点の克服にしていねいに努めていくことが大切であり、そうすることでよりよい結果が生まれるはずで、一時、閉校の条例を凍結し、その間行政と住民が充分協議するという主旨で、わたしは条例の改廃に賛成します。

本日、3000万円という大金を、河合谷小学校の耐震改修のために寄付するという町

民が現れました。全津幡町民にとっても誇りであり、宝なのだから、けっしてなくしてはならないという思いからだということです。

耐震で多額のお金がかかるということが、閉校の理由のひとつにあげられました。石川県で公立学校の耐震調査率ワースト1位という不名誉な実績しか無いこの津幡町だけに、河合谷小学校の耐震工事にいくら必要なのかということは簡単には推測できません。しかしこの寄付金の申し出を出発点にして、全国に河合谷小学校の存続のための援助を呼びかけるのはどうでしょうか。さらには特別認定校の枠を拡げ、山村留学の制度を整備して全国の児童たちに門戸を開いた小学校を作り上げられたらと私は夢想しています。議員のみなさんとともに知恵を出し合い、汗を流し合ってすばらしい小学校を作り上げられたら、というのが私の理想です。地方自治にとっても、児童教育にとっても、歴史的な聖地である河合谷小学校の灯はけっして簡単に消してはなりません。

小規模特認校の河合谷小学校に在籍し、卒業した中学生が、いまでも収穫祭、運動会、さわらび祭、プールのそうじなどの手伝いをしに、はるばると他地区からやってきます。かれらは河合谷を第2の故郷と思っています。

つい3日前、10月28日に、さわらび祭がありました。さわらび祭が終わったあとにグラウンドで野球遊びをしていた中学生がいました。わたしはその子に河合谷小学校がなくなるとどう思うかとたずねました。かれは河合谷地区以外から河合谷の特認校制度を利用して卒業した男の子です。その子が言うには「なくならないで欲しい」とそういつてボールをノックしました。遠くまで飛んだこのボールを、議会というミットでキャッチしなければいけないと思いました。

以上で私からの、凍結を念頭においての「津幡町立学校設置条例の一部を改正する条例」の改廃に賛成する立場からの討論を終わります。

1) 学校がなくなったらどうなるか、想像してみろ。

(精神的基盤を失う。教育機関がなくなり、人口が減少、診療所の閉鎖、公営バス流通の廃止、老人人口率の増加、限界集落と化する)

(行政は教育の視点にたったのみ、河合谷小学校の閉校問題を見ているが、これは地域の存続に関わる重要な問題。学校がなくなれば地域の崩壊が、始まる。)

2) 行政は住民からの信頼を失う。

3) PTAの保護者から聞いたことだが、教育委員会は「特認校としてのことは話せませんが、河合谷小学校のこととして・・・」と話し、小規模特認校としての河合谷小学校についての話がない。小規模特認校としての評価はどうか。いつもこの論点で話されたことが

ない。

4) 現在通っている子どもたちが河合谷小へ通い続けたいと思っている気持はどうなるのか。

閉校に賛成している議員、反対している議員からのいろいろな意見があったにも関わらず、今回の臨時議会によってだれもが同じように感じたこと、知ったことがひとつだけあります。それは、行政側と町民とが主張していることに大きな食違い、矛盾があるということが明らかにされたということです。町長は閉校の過程に手違いはないとし、町民は行政側との協議はなかったと主張しています。

いま大切なのはどちらが正しいのかということではありません。

いま大切なのは行政も議会も、立ち止まって目の前のこの現実を直視しなければならないということです。

教育、そして地域の崩壊に繋がるこのような重大な問題を町民の理解なしにもし、推し進めるとしたらどうなるか、想像しなければならないのです。

町民と手を携えて歩むのが、行政の姿ではないでしょうか。本当にこのまま押し通していいのか。いま議会に問われているのはその判断なのです。

28日、日曜日、河合谷小学校でさわらび祭がありました。児童、先生、保護者、地域の人たちが一同に集まって、子どもたちの演奏会や劇、研究発表会が行われました。夫婦同伴で参加している保護者もたくさんいました。先生、保護者がステージの上で、大熱演する姿も見られました。わたしが、河合谷ってすごいなあと思ったのは、卒業生やかってここで先生をしていた方も参加していることでした。舞台上でトランペットを吹いたり、歌ったり。

さわらび祭が終わって、ふと校庭に目をやると野球をしている子供たちが目に入ったので駆け寄って尋ねました。中学3年だという男の子は、さわらび祭、運動会、収穫祭、プール掃除などに毎年参加しているのだそうです。太田や津幡から河合谷小学校に通っていた子どもたちです。小学校はなくならないでほしいとあって、ボールをバットにあてました。

学校が地域にとって、どんなに大切なものか。そして太田から津幡から河合谷へ通い続けた子どもたちにとってもかけがえのないもの、第2のふるさとになったのだと思います。

閉校に賛成している町民の意見があるから、わたしは閉校に賛成だと説明する議員もいる。地元の子どもが減っているのだから、廃校にせざるを得ないのではないかという議員もいる。そして、町長は子どものためを思って、苦渋の選択で閉校やむなしとおっしゃる。一方町民は、2000名の署名を集めた直接請求で、「わたしたちは協議の場を、持たされていない。条例を改廃し、もう一度、そして時間をかけて同じテーブルの上で協議しよう。」と訴える。